態度で、何か物を考へているらしい樣子でしたが四日目になりて、母飯をかしがんとて火をたきつけたのを見て利三は急に口を開き「お母さん火はあぶないなあー」といひましたそうであります。其の後日增にだん〳〵と性質はかはつてきて、火を大切に取り扱ふやふになりましたそふであります。それから十四五日たつてから「ぼーや汝はたいへんにをとなしくなつたから、をもちやを買つてあげやふ」と母がいひしに、彼れのいふには「ぼーはたく澤山あるからいらない」といつて其の后「ぼーは今日ははまさんと、みよさんと勝三さんにをもちやをかへしてくるよ」といひて殘らず返したそうであります。をもちやの事は彼れ自ら其の非を知りて返すやふになつたのであります、こうゆうふうに少しの手段のためにかわつたのでありますが、一体此の子供の性質は如何なる者でありませうか、又如何して少の事に依りて是非善惡を省みるやうになつたのでありませうか、御考へつきになりましたならば御示教を願ひ度のであります。

手毬歌（其一）

備後國深安郡春日村　通信員　佐藤龜一

手毬と手毬と行逢て行逢て。一つの手毬がいふ事にやいふ事にや。こちらへどんせい奉公しよふ奉公しよふ。奉公口はどこかいなどこかいな。奥の奥の御番所じや御番所じや。御番所娘はよい娘よい娘。わしたの晩からよめりさしようよめりさしよう。よめり道具は何々じや何々じや。箪笥に兩掛はさみ箱はさみ箱。これだきしたてゝやるから

にやるからに。あとへ歸ろと思やんな思やんな。あとの田地は誰にやる誰にやる。向の丈夏にやつてくれやつてくれ。向の丈夏は田地持ち田地持ち田地廣めてくら建てゝくら建てゝ。くらのまわりへ松植へて松植へて。松の小枝へすゞさげて鈴さげて。鈴がじやんじやん鳴る時にやなるときにやじいさんばーさん嬉しかろ嬉しかろ。

手毬歌

三河國西加茂郡筥生村字黑笹通信員

近藤ときゑ

一に俵をふまへて　二にニッコリ笑つて
三に盃手に受けて　四つ世の中よい樣に
五ついつもの如くに　六つ無量息災に
七つ何事ない樣に　八つ邸をひいろめて
九つこゝらに家立てゝ　十でとんと治まつた

四月の天地

川口孫治郎

園藝。上旬より亞麻、長瓢、圓瓢、王蜀黍、落花生、馬鈴薯、西洋葱、除蟲菊、下旬より西瓜、甜瓜、唐胡麻、里芋、やつがしら、などの種下し楓、木犀、無花果、佛手柑などの植替に適す。其折々。更衣、昔は月の朔より袷に更め、足袋を穿かざるを例とせしが、今は太陽暦に依り舊式を踏まず。

三日、恭しく、皇祖の遺烈を追慕し奉る。